コメントＡ：山田敦子（小学校の立場から）

公立小学校の国語教育教育の現状

山田　ただ今、4 人の先生方から国語教育に関わるいろいろな角度からのお話を伺わせていただきました。ありがとうございました。私の役割はそのお話を伺いまして小学校の立場から国語教育についてお話をさせていただくということなのですけれども、今日お集まりの皆様方の中で公立の小学校の教員は花島さんと私だけだと思います。児童・生徒はほとんど、日本の子どもたち、外国から来た子も含めてですけれども、公立の学校で学習をしていると思いますので、少し役割から外れるかもしれませんけれども今の公立の小学校の様子をお話させていただきたい、と思います。

皆様方は、学校のいろいろな問題点や現状などはいろいろなところでお聞きになっていらっしゃると思いますけれども、まず、公立小学校の国語教育の現状について子どもたちと教師の面から考えてみました。子どもにつきましては、恐らく皆さんがお考えになっていらっしゃる以上に面倒な学習はしたくない、我慢したくないという傾向が強いのではないかと毎日子どもを見ていて感じます。ただ、そういう中で、ではすべてのことを嫌がっているかというと決してそうではなくて、例えば、話すこと、書くことの学習について言えば、題材に興味が持てたり、自分が学習に関わっていける内容がたくさんあったり、わかったり、学習の場の設定が面白かったり、という学習の工夫を教師がしますと、非常に喜んで学習に取り組む一面ももちろん持っております。また、音読や動作化、劇化などはマスコミの影響もあるのかなという気がいたしますけれども、低学年の子どもたちはほとんどの子どもが大好きです。けれども、嫌なことはしたくないという傾向が強いのが、今の子どもの一言で申し上げられる実態です。

それから、音声言語に関わって申し上げますと、1 年生に入学した時点で皆に聞こえるぐらいの大きさの声で話をすることができないで、つぶやくように話す子どもが半数ぐらいいるように思います。そんな中で、教師はといいますと、何とかそういう子どもたちに学習させたいと思っているのですけれども、教科書と指導書による指導がほとんどというのが現状だと思います。私も学校の教員といろいろと話はするのですが、やはり教科書、指導書から離れられない。

他教科との関連

先ほど寺井さんのお話にもございましたし、それから棚橋さんのお話とも関わりますけれども、他教科の中でも必要に応じて、その都度ことばや漢字、話の仕方や、言い回しに関わる指導等はしております。ですけれども、それは例えば算数、例えば理科の中で必要だからその指導をしているということで、ことばの学習をさせているという意識ではありません。が、決しておざなりにしているわけではないと思います。しかしそんな中、非常にたくさんの教師がおりますので、その指導力は、特に国語につきましては非常に差が大きいです。これは、「指導内容、指導方法に迷い」、「指導内容が具体的に見えない。指導

の系統を見通していない」という実態からくるものと、私は考えております。

気持ちを読ませる学習について

　最近よく問題になります、気持ちを読ませる学習が多いという話についてですが、これは以前はそうではなかったように思います。40 年代辺りまでは、まず物語文を勉強する時には意味のわからないことばを辞書で引いたり、漢字を覚えたりすることから学習に入っていき、ことばの学習を重視していたように思います。それが、その内そのようなことばの学習のさせ方では実の場で使えない、文章の中で理解させてこそ生活に生きることばの学習になるのだという考え方が強くなりました。その結果、大多数の子どもが一番納得しやすい気持ちを中心に学習させることになったと思います。登場人物の気持ちを考えさせるという学習ですと、子どもが話しやすい、教師も発問しやすい、それから子どもの学習の程度が評価しやすいといったいろいろな理由から、教師がまず好きになり教科書もだんだんそのような傾向になっていったのではなかったかと、私はそのように受け止めております。無理もないなとは思いますが、ただこれではやはり子どもたちに生きて使えることばの力はつかないなということを非常に強く感じております。

教科の関連を持たせる指導を

　では、どうしていったらいいのかを公立の学校の教員の立場で考えてみますと、やはりことばの学習は教育課程全体を通して、全職員が意図的に、それから計画的に全教科を見ながら学習させていかなければならないことは明らかなことだと思います。先ほど附属では教科担任制を小学校でもとっているというお話がございましたが、公立の学校は本当にいろいろな子どもがおりますので、やはり学級担任制の良さを生かすことはすごく大事なことだと思います。学級担任が子どもの力を見ながら、自分で担当できる教科を全部見渡して、この教科とこの教科は関連させながらこういうことばの力をつけていきたいといったこと、先ほどの寺井さんのお話、それから昨年度の棚橋さんの書かれたものの中に、例えば方法科というものも考えていくといいのではないかという箇所がございましたことを思い出したのですが、そのようなことも含めながら、やはり担任が全部の学習内容を見通して計画を立てながら学習させるといった形でなければ、国語の力、ことばの力は子どもたちに付いていかないように思います。そして、それを指導していく教員ですけれども、本当に大勢の教員がおりまして、年齢、性格、考え方、それから一番大きいのが今までの馴れや、習いといった部分ではないかと思うのですが、なかなかそれから離れられません。そういうことを考えますと、先ほど上谷さん、安さんからのお話にございましたけれども、外国の学習指導要領にあたるものはかなり、系統立てて細かくできているのではないかという感想を持ちながら聞かせていただいたのですが、日本でも今の学習指導要領は非常によくできていまして、確かに日本語学級の子どもたちがことばを獲得していく過程も学習指導要領の過程とほとんど同じだなあとよく考えます。これから日本の子どもたちにことばの力をつけていくためには、より具体的で細かく系統立てた内容で、指導の手引きになり、資料集にあたるようなものを作ってほしい。その中に必要な語彙や学習方法などまで

含めた形での指導の具体的な資料になるものがなければ、公立学校の、たくさんいる教員が、同じように子どもにことばの力をつけていくのは難しいのではないかなと私は考えます。

　また、入学時からなかなか話ができない子どもが多いことを考えますと、幼稚園、家庭との連携といったことも国全体で考えていかなければならないことなのではないかと考えます。

甲斐ユ　どうもありがとうございました。それでは、続きまして成田さんよろしくお願いいたします。